

--	--	--

一次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは黄色の解答用紙に書きなさい。

〈ここまでのあらすじ〉

高校三年生の戸田零二は離島で石の博物館を営む祖父、城山栄一の元を訪ねている。零二は陸上競技にうちこんでいたが、けがのために全国高校駅伝への出場がかなわず、T大のスポーツ推薦も辞退せざるをえなかった。高校から陸上を始めた同級生・田宮健太の言葉でけがの手術を乗りこえたが、全国大会へ出場した田宮に素直に向き合えないでいる。

そばが茹で上がると、祖父は出汁を入れた器に盛りつけ葱を散らした。湯気が立つ器を零二が居間まで運び、炬燵の天板の上に並べる。

「よし、食うか。まさか零二と年越しそばを食べられるなんて、思いもしなかったな」

向き合って座った祖父が、**マンメン**の笑みを浮かべる。零二は祖父ほど a 屈託なく喜べなかったが、同じように笑いながら「いただきます」と手を合わせた。

「じいちゃん、真鍋さんの実家にも行ったんだね。鉾山めぐりの旅で仲良くなったの?」

鰹出汁の染み込んだそばは、零二に空腹を思い出させた。そういえば朝も昼もパンしか食べていなかったの、温かいものが喉を通るのは今日初めてのことだ。

「そうだな。あいつの実家に招かれたのは、鉾山めぐりの旅から戻ってすぐの盆休みだった。東京には**キセイ**しなと言ったら、だったらうちの島に來ないかと誘ってくれたんだ」

「真鍋さんでこの島の人の?」

「ああ。ここじゃないが、真鍋の故郷も瀬戸内に浮かぶ小さな島だ。今日おまえが多度津港から乗ってきた船があるだろう? 船が次に向かった島が、真鍋の故郷だ。五十五年前のわしと真鍋も多度津港から船に乗って、島に向かったんだ。わしが暮らしていた東京の町に海はなかったから、目の前に迫る蒼い海がとても新鮮でな」

船のエンジン音。風の音。波の音。白波を立てながら前へ進む船の上で、自分の心が無になっていくを感じたと祖父が両目を閉じる。

「海を見ていると、他人とはなにも比較しないでよかった。自分は自分でしかない。船の上で風に吹かれながら、わしはそんなことを考えていた。そう思うと無性に大声を出したくなって、わしは甲板の上から『海は最高だ!』と叫んだんだ」

「じいちゃんが叫んだの?」

「ああ。真鍋もびつくりしとったわ」

そして船は、真鍋の家族が暮らす小さな島に到着した。

「船から島に下りたとたん、わしは自分が大きな誤解をしていたことに

気づいたんだ」

「大きな誤解って?」

「わしは真鍋のことを、裕福な家庭で何不自由なく育った坊ちゃんだと思っ

てつきあっていた。品もいいし、とにかく人に親切で」

「違つたの?」

2 たしかに真鍋は豊かな暮らしをしていた。でも裕福というのは、少し違つてた。真鍋の親父さんは、漁師だった。おふくろさんは親父さんと一緒に船に乗りながら、島内で郵便配達の仕事もしていると聞いた。海辺の集落にあった真鍋の実家は、青い屋根瓦の小さな平屋でな。玄関から一番奥の部屋の中が見えるほどの広さだった。わしが寝泊まりさせてもらったのは四畳半の奥の部屋だったが、家中の話し声は筒抜けだったしな」

その夜の晩ごはんを、自分はいまでも忘れていない。タチウオの刺身、アオリイカの天ぷら、カレイの南蛮漬けに麦みそのみそ汁……。息子の友人をもてなすために真鍋の親父さんとおふくろさんは早朝から漁に出かけ、腕によりをかけた料理を食卓に並べてくれた。どれもこれもうまさぎて涙がこぼれてきた。自分は真鍋竜生という男に助けられ、その両親にもこんなによくしてもらい、どうやってこの恩を返せばいいのか。そう思うと無性に泣けてきてな。だがその場ではなにも言えなかった。

3 ただ「うまい、うまい」と飯をかき込むだけで、精一杯だった。

「夕飯の後、真鍋と二人で海まで歩いたんだ。家は海辺にあったから、ほんの二、三分の距離だがな。二人で海を眺めながら b とりとめのないことを話し、その時初めてわしは自分の話をしたんだ。八歳の時に父親が戦死して、母親と二人で生きてきたことなんかをな……」

――真鍋、おまえの故郷はいいところだな。

海から吹いてくる風には匂いがあるということに、驚いていた。思えば海水浴に行ったことなど一度もなかった。

――海しかないところじゃけど。

――いや。いいところだ。それにしても鉾山めぐりは疲れたな。もうこりこりだ。

途中から自分も夢中になって石を拾っていたくせに、その時はなぜかそんなことを口にした。

――つきあわせて悪かった。じゃけど城山がこの夏いっぱい大学を辞めるって言うから、最後にどうしても思ったんじや。

もともと声が大きくないのに、海から吹く強い風が、真鍋の声をかき消した。

――そうだ。おまえ、どうしておれにノートを見せてくれたんだ? いまさらだけど。

——試験前だったからじゃよ。

——それだけでか？ おまえは本当に人が好いな。

——いや、それだけじゃない。ぼくは城山のことをすごいと思うとったから。

——おれが……すごい？

——二十八歳で大学受験するなんて、 できることじゃない。

入学式の時にきみを見た時から、友達になりたいと思うとったんじゃ。

手ぶらで家を出たので、真鍋は石を拾ってはズボンのポケットに入っていた。海辺の砂地には時々珍しい石がある。子供の頃はいい石を探しに、毎日のように島を歩いていたのだと真鍋が足元を見つめる。

——ぼくは昔から、ひとりて石を拾って遊んでたんじゃ。この石はどこから来たんじゃろう。そう考えると、大きな世界を覗いた気分にもなれたんじゃ。

大学を卒業したら理科の教師になろうと思うとる、と真鍋が拾った石を夕陽に透かし呟いた。幼い頃から体が弱く、親に漁師は無理だと言われてきた。自分には姉がひとりいるが、岡山にある学生服を作る会社で働いている。姉は中学を出てからは会社の寮に入っていて、家に仕送りをし続けている。両親と姉は自分の将来を思い、「勉強を続けたらいい」と大学に行かせてくれた。だから家族に恩を返したい。島から通える学校で、理科を教える。それがいまの自分の目標なのだと思鍋は海を見つめる。

——食券を……。

——食券？

——悪かったな。おれ、おまえにしょっちゅう飯を奢らせて……。

——ああ、そんなこと。まとめ買いしてたくさん持ったから。4 あそこの食堂、大量に買えば買うほど割引率が高くなるんじゃよ。

真鍋の両親が命を張って海に出て、姉さんが縫子をして、それで仕送りをしていた金で自分はタダ飯を食っていた。真鍋の家には金が余っているのだらうと思い、さほど感謝もしていなかった。申し訳ないと思った。ひたすら情けなくて、その時の自分は真鍋の顔を見られなかった。水平線に視線を伸ばし、海を見るふりをしていた。

「この話を聞いたすぐ後、^{〔注〕}真鍋の細君がばあさんを連れて砂浜にやってきたんだ。部活の帰りだとかで夏休みなのに制服を着ててな。二人とも真っ黒に日焼けしていて、焦げパンみただった。真鍋が実家にカメラを取りに戻って、浜辺で記念写真を撮ったんだ。ばあさんのことはよく喋るおもしろい子だな、という印象くらいしかなかったな、その時は」

真鍋の実家から岡山の下宿に戻ると、自分の中から^{〔注〕}大学を辞めようという気が失せていた。憑き物が落ちたように、きれいさっぱりなくなっていた。5 自分の弱さを受け入れた時に初めて、人は強くなれる。

6 祖父はそう口にすると零二を見て頷き、かすかに笑った。

「零二、手が止まってるぞ。早く食べないと、せつかくのそばが伸びてしま

う」

器の端に口をつけ、ぬるくなった汁をひと息に飲み込んだ。芳ばしい醤油の甘みが鼻を抜ける。器の出汁汁を最後まで飲み干すと、零二は手を合わせて「ごちそうさま」と箸を置いた。祖父の人生にそんな危うい日々があったことを初めて知り、7 いつも自信に溢れてみえたその顔が、いままでとは少しだけ違って見えた。

「よし零二、わしは作業の続きをしてくるからな。空の器は流しに置いてくれ」

炬燵の天板に両手をつき、祖父が腰を上げる。

「まだやるの？ ちょっと休んだら」

「いや、時間がない」

器と箸を流し台に運ぶと、祖父はすぐさま部屋を出ていく。時間がないのなら、リニューアルオープンの日を延期すればいいんじゃないだろうか。もう夜中の一時前だというのに、いまからなにをするというのか。張りきって改装したところで、元旦早々、こんな離島の小さな博物館に客など来ないだろう。そんなことを頭の中で考えながら、零二は炬燵を這い出た。居間の電気を落とし、氷のような廊下を歩いて玄関口に下りる。あたたかい部屋にいたせいか、中庭に出ると、ずいぶん気温が下がっているような気がした。

「ざつむー」

白い息をわざと大きく吐き出しながら空を見上げると、夜を忘れるくらいの無数の光があった。

きれいだな。

零二は子供のように星に見惚れる。白い星に意識を吸い取られそうになりながら、ポケットに手を入れて携帯を取り出した。田宮から届いた『戸田へ』で始まる長文が、青白い光とともに画面に表示される。

戸田へ

おれ本当は、高校でサッカーするつもりだったんだ。

でも入学式の翌日、グラウンドでおまえが走っているのを見た。誰よりも早く入部して先輩たちについて走り続けた。

なに考えてるんだろ。

とてつもない速さでトラックを回るおまえを見ていると、走り続けるその目でいつたいなにを見ているのか、そんな

ことが気になった。

苦しそうで、でもすごく気持ちよさそうで、おれも同じ場所に立ってみたいと思った。

この二年と九か月、^{かめ}亀の歩みでおまえの背中を追ってきた。

戸田はおれにとってウサギだ。

決してサボらないウサギだ。

卒業まで陸上を続けられたのはおまえのおかげだ。

感謝してる。

「大でおれは箱根に出たい。

受験勉強、苦しいけど頑張ろ

う。そしてまた一緒に走ろう。」

こんなに真つずぐな言葉をもらったというのに、自分は田宮になにも返せないでいる。田宮から、受験から、陸上から、大事なことから全部逃げ出してこの島にたどり着いた。

「おれってほんと、だめな人」

ふがいなさに目の奥が熱くなる。⁸泣きたいのを必死でこらえた。冬に流す涙はきつと、氷のように冷たい。

(藤岡陽子『海とジイ』)

【注】

1 真鍋の細君がばあさんを連れてⅡ「細君」は後の真鍋の妻、「ばあさん」は後の祖父の妻を指す

2 大学を辞めようという気Ⅱ祖父は当時初めてつくしの東京の生活にとまどい、自分より年下の学生と自分とのおいたちの差を感じて大学になじめずにいた

問一 本文中の太字のカタカナを漢字に直して答えなさい。

問二 a 屈託なく b とりとめのない のここの意味としてもっともよくあてはまるものをそれぞれ次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

a 屈託なく

ア 無理をしない様子 イ のんびりしている様子 ウ 何も心配することがない様子 エ 心がこもっていない様子

b とりとめのない

ア まとまりがない イ いっわりのない ウ とどめられない エ 答えがでない

問三 1 わしは甲板の上から『海は最高だ!』と叫んだんだとありますが、この理由としてもっともよくあてはまるものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 東京にはない青い海がとても新鮮で、他に言い表す言葉が見つからなかったから。

イ 東京での生活とはちがって、ここではありのままの自分を受け入れられたから。

ウ 東京では気づけなかった他人とはちがう自分の良さを見つけることができたから。

エ 東京にはない大自然を前にして自分の小ささに気付き、それをかくそうとしたから。

問四 2 たしかに真鍋は豊かな暮らしをしていた。でも裕福というのとは、少し違ってた。について、次の問いに答えなさい。

(1) 「裕福」とはこの場合どのような生活のことですか。解答らんに合うように考えて書きなさい。

(2) 「豊かな暮らし」とはこの場合どのような暮らしのことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び、記号で

答えなさい。

ア 美しい海に囲まれてなやみから解放された生活。

イ 家中の話し声が筒抜けでいつもにぎやかな生活。

ウ 海のそばで自然のめぐみが身近にある生活。

エ 家族で支え合い心が満たされている生活。

問五 3 ただ「うまい、うまい」と飯をかき込むだけで、精一杯だったとありますが、このときの心情としてあてはまらないものを次のア～オの中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 感謝をあらわす方法が思いつかないので、ご飯をおいしそうに食べることでその気持ちを表現している。
 イ 真鍋一家の温かさにふれるにつけ、自分のおいたちが悲しく思われたが、それに気付かれまいとしている。
 ウ 真鍋竜生とその一家に助けてもらい感謝しているが、その気持ちをどう伝えればよいのか分からずにいる。
 エ 東京では食べられないような、真鍋の家族が腕によりをかけ心を込めた料理のおいしさに感動している。
 オ 真鍋竜生に助けてもらったので、恩返しをしたいがそれもできず、そんな自分がいやでごまかしている。

問六 空らん

に入る言葉としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア せいぜい イ つつら ウ そうそう エ うかうか

問七 4 あそこの食堂、大量に買えば買うほど割引率が高くなるんじゃないかとありますが、なんのためにこのように言ったのですか。考えて書きなさい。

問八 5 自分の弱さを受け入れた時に初めて、人は強くなれるとありますが、この場合「自分の弱さを受け入れた」とはどういうことですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人との差に引け目を感じていたが、真鍋と関わる中でそのような考えが消えて気楽になったということ。
 イ 友人と交わらずにいたが、真鍋の実家での生活を通して人との交わりの豊かさに気付いたということ。
 ウ 真鍋が裕福だと誤解していたが、自分の生活と差がないことに気づき申し訳なく思ったということ。
 エ 大学をやめようと思っていたが、真鍋が将来について語る姿を見て目標を取り戻したということ。

問九 6 祖父はそう口にすると零二を見て頷き、かすかに笑ったとありますが、なぜですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の話を零二はきくと理解してくれるだろうと思ったから。
 イ 若いころの思い出がよみがえりなつかしい気持ちになったから。
 ウ 零二に伝えたいことを伝えられて胸のつかえが取れたから。
 エ 自分の過去が零二の役に立ったと実感し達成感を得たから。

問十 7 いつも自信に溢れてみえたその顔が、いままでとは少しだけ違って見えたとありますが、このときの零二の心情を表す言葉としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 満足感 イ 違和感 ウ 親近感 エ 緊張感

問十一 8 泣きたいのを必死でこらえたとありますが、なぜ「こらえた」のですか。その理由としてもっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 涙を流してしまうと自分の弱さを目の当たりにして、田宮に負けたような気がするから。
 イ 過去の弱い自分から変わった今の自分にとっては、涙は余計なものに感じられたから。
 ウ せっかく過去の話を語ってくれた祖父に対し、涙を流すのは申し訳ないと思ったから。
 エ 自分の弱さにあらためて気付いたが、そこから逃げずに受け入れてみようと思ったから。

二次の文章を読んで後の問いに答えなさい。答えは、問九以外は黄色の解答用紙に書きなさい。問九の答えは 国語―七 の解答らんに書きなさい。字数の指定のある問題は句読点も一字と数えます。

建築家という職業について考える際に、まず最初に建築をつくり上げる上において本当にさまざまな要素があるということを知る必要があります。複雑なものをいろんな人との共同作業でつくるということもそうですが、僕が大切にしたいものの一つに、いかに美しいモノをつくるか、ということが挙げられます。

洗練された美意識によつて創出された美しい素材の組み合わせや、きれいなプロポジションというものがあります。自然界にある植物は、説明不要に美しい。一本の樹木は、**A** 景における葉の茂り方も、**B** 景で見る枝振りも、あるいは顕微鏡などで見た細胞レベルにおいてまで美しいものです。野に咲く一輪の花の美しさもまた、無条件に人の心に響くものがあります。

しかし、僕がよく想像するのは、見えているものの美しさの向こう側にあるかもしれないもう一つの世界のことです。**C** に手で触れることができるのではなく、そうしたモノに宿った「見えない世界」の美しさについて考えるようにしています。

建築家として建物を設計する際に、目に見えるモノだけを考えながらデザインするのでは、何か物足りない気持ちになることがあります。表層だけが美しくても決していい建築にはならないと思うからです。本当の美しさは、見て美しいだけでなく、五感のすべてに訴えかけるもの。実際に、建築が完成するまでに現場で働いている建築家としては、最終形態として完成する美しいモノの背景にあつた見えなくなってしまうものにも、気を配らないといけません。

つまり、**D** な美しさを支えているのは、見えなくなってしまった下地など、そのプロセスにこそ依存しているということがあるのです。それは、何か見えない法則のようなものが支えている美しさの強度かもしれません。

一例を挙げてみたいと思います。一枚の土壁が完成するのには、竹から編まれた「**注1**」竹小舞が下地になります。そこに、土や砂を水と丁寧^{ていねい}に調合した粘土^{ねんど}のようなタネを鏝^{こて}で竹小舞にひっかけるようにして塗り込みます。下塗りをしたら乾かせますが、乾燥すると壁がひび割れます。下地をパリパリとひび割れさせてから、数日後に中塗りをします。また乾燥させて、仕上げのタネを塗る。とにかく手間と時間がかかる作業であるため、今では一軒丸々土壁という家をすっかり見なくなりました。**1**物質としての土壁が、その場所で呼吸をし、水分を吸収したり、放出したりしながら、「**注2**」左官職人の手の痕跡とともに、完成していくと独特な輝きを放つようになります。

完成した土壁には手間暇^{てまひま}かかった竹小舞はもちろん、積層させるように丁寧に塗り重ねられた下地の壁はすてに見えなくなってしまうです。ひび割れた下塗りも、もはや、いっさい見えません。しかし、そうした職人たちの思いは、必ず土壁の表面からにじみ出るものです。竹小舞でなく、薄いボードの下地にわずか数ミリの厚みでちよこつと土を塗っただけでつくられた土壁には、どうしても長い時間に耐える強度が備わりません。**2** 見せかけの美しさは、弱い。仮に、「**注3**」竣工^{しゅんぐう}当時は同じく美しく見えたとしても、しばらく時間がたつにつれてガタがきます。楽してつくられたものは、決して持続可能な美しさを獲得できないのです。

表面が一見美しいフローリングは、無垢^{むく}の木材と比べて、パツと見同じように見えるかもしれませんが、その床の上を裸足^{はだし}ですつと過^あぎしてみようと、木のぬくもりや、味わいなどの違いが必ず感じられます。自然素材は、硬く均質^{くわんしつ}できれいなフローリングと違って、節があつたり、**反**つたりして、まったく平らではないこともあります。しかし、そうした自然の動きもふくめて家を**コウセイ**しているモノが美しいと感じられるようになりたいと思っています。

料理にたとえるとわかりやすい。本当のおいしさは、手間を惜しまず準備された料理に宿るのではないでしょう。食卓に並べられた料理には、それを丹精^{たんせい}こめて調理してくれた母親の思いや、その食材に愛情を注いで育ててくれた農家さんたちの痕跡はもはや見えなしかもしれません。しかし、そうした**E** なものは、きつと見るのとは違った形で僕たちが感じるができるのだと思っています。

外的な表象の美しさの有無にかかわらず、**3**物質的なモノの世界を超えて、見えない物語へとアクセスする扉^{ひら}をみつきたい。レストランの厨房^{ちゅうぼう}では、おいしい料理を客に提供するためにほとんどの時間は、開店前の仕込み^{こみ}にかかつていたりします。「**注4**」コンビニエントな料理は、コンビニエントな味^{あじ}しかしません。出汁をとつたり、食材をきれいに洗って切つたりする作業には、近道などないのです。

先に述べた土壁の例に戻ると、土壁に降り注いだ太陽の光がつくり出す陰影^{いんえい}の美しさは、見あきることがありません。ほればれする土壁を見ながら、それを塗ってくれた左官職人のことを思ったり、原材料の土があつた山の風景に想い^{おも}を馳^はせたりするほど、うつとりする美しさというものがある。床においても、歩きながら足の裏で感じた心地^{こころち}よさを介^かして、つくってくれた大工さんや、伐^きられた森に想像を巡^{めぐ}らせた。

実際に見えるモノだけではなく、その向こう側にあるかもしれない見えないものに、建築家として対処することができないだろうかといつも考

えています。その内に美しさを秘めた見えない存在を、仮に「物語」と呼んでもよいでしょう。

多重に絡み合っていく中で、見えにくくなってしまった物語を丁寧に組み上げて、空間の魅力を発見していく。物語は、見えないのみならず、数値化もできません。しかし、そうした見えないものとの交流を通してこそ、本当の **F** は発見できると信じています。

鳥山明の描いた名作漫画『ドラゴンボール』では、「スカウター」という目に取り付ける機械が出てきます。それは、相手の戦闘能力を教えてくださいますが、世の中の多くのものはそもそも数値化できません。なにも霊的なものについてお話ししているわけではありません。ただ、亡くなったおじいちゃんの形見の腕時計には、何か特別な想いが宿っていて、**4** 他人には無価値であっても、その物語を受け取ることができる人にとつては、かけがえない価値のモノであるはずで

空間も同じく、そこにたずさわった多くの人の数値化不能な想いを宿しています。それを、無価値に考えることに強い違和感を覚えます。部屋の面積や家賃、駅から徒歩何分といったデータは、計測可能な数値化できる建築の価値の一側面に過ぎません。そのような **X** 尺度は空間を評価する上で、比較しやすく、査定する上でも **ツゴウ** がいいものです。そうした **Y** 切り口が必要なのは、よくわかります。

問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 空らん **A**・**B** には、それぞれ反対の意味をもつ漢字一字が入ります。考えて書きなさい。

問三 **1** 物質としての土壁が、その場所で呼吸をし、水分を吸収したり、放出したりしながら、とありますが、具体的にどういうことを指していますか。解答らんに合うように二十五字以上、三十字以内で答えなさい。

問四 **2** 見せかけの美しさは、弱いとありますが、なぜですか。もっともよくあてはまるものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。
 ア 表面の美しさを職人たちが追求めるあまり物質としての強度をないがしろにしていたから。
 イ 職人たちが手間暇をおしまずに思いをこめて作り上げた結果としての強度が備わっていないから。
 ウ ぬくもりや味わいのある自然素材は変化していくプロセスを人間が管理することができないから。
 エ 見せかけの美しさは他者からどう評価されるかということだけを気にして作られたものだから。

問五 空らん **C** **E** に入る言葉としてもっともよくあてはまるものを次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 表層的 イ 論理的 ウ 多角的 エ 無造作 カ 不可視 キ 物質的

けれどもそれ以外にも空間に込められた声なき声としての物語があると思うのです。僕にとって価値のあるものが、あなたにとって無価値であることも多くあるでしょう。しかし、人それぞれの固有な価値のある物語を黙殺してはならないように思います。

万人にとって等しく価値があるように思われるお金みたいに、数値化可能なものは比較が容易であり、交換可能なものです。そのほかの多くのモノの価値は、人それぞれであり、そのように評価がバラバラで、違うものを、わざわざ同じ **ドク** に上げる必要などあるのではありません。みんな違った固有の価値観をもっているのだから、それを尊重することはあっても、比較したり、批判したり、ましてや優劣を付ける必要など、まったくないと思うのです。

（光嶋裕介『建築という対話』）

【注】

- 1 竹小舞 Ⅱ 土壁の下地となる、竹を編み込んだもの
 2 左官職人 Ⅱ 壁を塗る仕事をする人
 3 竣工 Ⅱ 工事ができあがること
 4 コンビニエントナ Ⅱ 手間がかからず便利なこと

問六 3 物質的なモノの世界を超えて、見えない物語へとアクセスする とありますが、どういうことですか。本文中から例を一つ探して、三十字程度にまとめて書きなさい。

問七 空らん **F** に入る言葉としてもっともよくあてはまるものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 技^{わざ} イ 美 ウ 物語 エ 希望 オ 強さ

問八 X 尺度 Y 切り口 のここでの意味としてもっともよくあてはまるものを次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 印象 イ 態度 ウ 論点 エ 視点 オ 考察 カ 基準

問九 4 他人には無価値であっても、その物語を受け取ることができる人にとっては、かけがえのない価値のモノであるはずですが、「物語」のあるものについて心理学者の河合隼雄^{かわい はやお}は次のように述べています。次の文章を参考にして、後の問いに答えなさい。

【河合隼雄『物語を生きる』より】

コップに野草の花がひとつ挿^さしてある。それだけのことなら、別に誰^{だれ}もその花に注目しないかも知れない。しかし、それは病気で寝^ねている母親を慰^{なぐさ}めようとして十歳^{じさい}の少女が下校のとき摘^つんできたのだと知ると、その花がたんなる花でなくなってくる。その花を介^かして、その少女に親しみを感じ、その母娘^{おやこ}の間の感情がこちらに伝わってくる。そこに「関係づけ」ができてくる。そのことに感激すると、そのことについて誰かに話をしたくなる。友人に話をするとき、少女が花を買おうと思ったのだが、彼女には高すぎたので困^こってしまったが、ふと野草の花を見つけて……というふう^うに話が少し変わることもある。それを聞いた人が他人に伝えるときは、母親がその花を見て嬉^{うれ}しく思うと、高かった熱がすうーと低くなって……とつけ加えるかも知れない。

【問】

あなたにとって「他人には無価値であっても、その物語を受け取ることができる人にとっては、かけがえのない価値」がある「モノ」を一つあげ、どのような「物語」があるかを説明しなさい。ただし、問題文にある例を用いてはいけません。

--